学校教育実践学研究，2023，第29巻，1－7頁

教育的アプローチで虐待を受けた子どもたちを救えるのか
―フィリピンの施設を参考にして―

池田　いぶき*・栗原　慎二

（2022年12月5日受理）

Can an Educational Approach Help Abuse Children?
―With Reference to an Institution in the Philippines―

Ibuki Ikeda and Shinji Kurihara

Abstract: In Japan, approaches to abuse are mainly medical and psychological approaches, and other approaches have not yet been established and are not widely utilized. Therefore, the purpose of this study was to obtain suggestions on how to respond to abuse from the activities of Stairway, a Philippine NGO that protects abused children and has achieved positive results. The analysis was based on interviews with staff and children, as well as information from their website. The results revealed that the approach is based on a multifaceted assessment that includes psychological understanding, that it emphasizes the development of self-esteem based on human rights awareness, that it focuses on specific support for social independence, and that its activities are conducted from the perspective of community development to achieve these goals. It was also suggested that activities are conducted from the perspective of community development in order to achieve these goals. These perspectives were considered to be applicable in Japan as well.

Key words : psychological understanding, Comprehensive approach, Abuse, self-esteem

1　研究の背景と目的

虐待に対する日本でのケアは心理的アプローチ，または医療的アプローチが主流である。

大迫（2003）は，トラウマを扱う心理療法的試みである回復的接近はいくつもされていると指摘している。浅野, 亀岡, 田中（2016）は，虐待対応全般において，身体的，心理的，情緒的安全性を強化し，自己コントロール感とエンパワメントを再び獲得する機会を創る支援体制である「トラウマインフォームド・ケア」が必要不可欠であるとした。犬塚（2016）は親と子どもと双方を対象としている治療プログラム AF-CBT（Alternatives for Families: A Cognitive Behavior Therapy）を紹介する中で虐待問題を抱えている家族の治療に有効と思われる構成要素として心理教育やカウンセリングを挙げている。

また，荒井, 安武, 笠置, 同光（2008）は医療機関を中心とした子ども虐待対応のためのネットワークについて明らかにしながら家族を地域の育児支援に繋げている。小林（2012）は医療の役割は法に定められたことだけでなく，子どもの虐待の診断や障害の治療，親や諸機関と連携することで再発予防を行うことにあるとした。さらに，田中（2016）は，虐待された子どものあらわす特異な行動は，心的トラウマの症状として診断され，社会病理ばかりではなく養育者の精神病理も要因として捉えた上で，治療についての知見や研究が積み重ねられ，治療技法が考案されていると述べている。

このように，虐待に対するケアについて，心理的な視点や医療的な視点からのアプローチが実際に多くなされ, 知見が積み上げられている一方で，被虐待児は家庭や学校や地域社会で生活をしてい

* 広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期

るという点からすれば，生活に根ざしたアプローチや教育的アプローチの必要性も見逃せない。では，こうした視点からのアプローチはどのような現状にあるのだろうか。

永井（2006）によると，ソーシャルワーカーがなしうる「治療的関わり」とは生活環境へのアプローチに他ならず，信頼関係の中で，他者から受け入れられる体験を重ねて，安心感や安全感，自己肯定感などを養い，社会的スキルを学習し，将来社会で生き生きとした自分らしい生活をしていけるよう支援することであるが，その具体的な技法は確立されておらず，ここで挙げられた専門的支援技法としては，ソーシャルスキルトレーニングや受容，人間関係・社会的スキルなどの心理社会的な支援であった。犬塚（2016）は，心理教育やカウンセリングだけでなく，ソーシャルサポート，感情調節，思考の再構成，ペアレントトレーニング，安全プラン，虐待行為についての責任の明確化と謝罪も家族の治療に有効と思われる構成要素であると述べている。さらに，大迫（2003）は生活環境全てを治療的に活用する働きかけを行い，日課や遊びが大きな意義を持つとする修正的接近が必要不可欠であるとし，小集団で十分なケアワーカーを配置し，自由時間にプレイセラピー，地域への貢献により地域の人との交流を深めるなどの心理学的援助である環境療法を重視している。森本,野澤（2006）は，環境全体が受容的で，共振・共感的なホールディングの関係性を重視し，個別ケア，多様な社会的支援体制を作る支援を必要とした。田中（2016）によると，基本的なアタッチメントへの理解がすすみ，アタッチメントの再構築についても議論されるようになっている。虐待などによって生じる社会的・情動的・行動的に困難を抱える子どもたちを支援しているイギリスでの Nurture Group では，学校において情動の交流機会として Circle Time を採用している（小玉・栗原・高橋・神山・森・宮村・川崎・壁谷・中田，2015）。この研究を受けて，永田・栗原・山崎（2021）は，フィリピンのストリートチルドレン保護施設で Circle Time を活用した教育的実践を行い，レジリエンスコンピテンシーの向上，暴力行為の軽減，学校回避感情の低下，自尊感情の向上，自己感情コントロールや自己感情理解などの向上などの効果を確認している。また，生島（2011）は，治療的専門里親としてファミリーホームを運営し，深刻な虐待体験や発達障害を有しており，さまざまな問題行動や精神医学的な問題が見られる少年たちと関わる中で，子どもたちにとって治療的教育的環境に置くためのシステム化・構造化が不可欠であるとしている。しかし日本における里親の専門性には限界があり，未だ支援の方法として広がっていない。

以上をまとめると，生活的アプローチや教育的アプローチは，心理的アプローチや医療的アプローチのような個別に対応するという側面は弱く，コミュニティや学校の環境や人間関係に働きかける様々な取り組みが試行錯誤されている様子がわかる。その効果が確認されている研究もある。しかし，現時点ではその方法は未確立であり，普及しているとは言い難い。

そこで将来子どもたちが精神的にも経済的にも自立し，豊かな生活を送れるような社会的自立を目指したケアを実践している団体を視察し，その詳細を検討し，教育的アプローチについての示唆を得ることを目的とする。

2　研究の方法

本研究では，実際に教育的アプローチを採用している Stairway の取り組みを詳細に検討する。2022 年 10 月 14 日にフィリピン共和国ミンドロ島のプエルトガレラにある Stairway を訪問し，スタッフと在籍する子どもへのインタビューを行い，そこで得た情報と HP の内容から分析を行う。

3　結果

3－1. 団体の概要

Stairway は社会的に弱い立場にある人たちに対するアドボカシー活動，能力開発，ネットワーク化といった活動を行っている。その活動は，子どもや家族，コミュニティといった足元の水準にとどまらず，社会福祉・開発省，教育省といった政府部門まで及ぶ問題意識に基づいている。また，国家警察，ソーシャルワーカー，教師，複数の非政府組織（NGO）の訓練と感化に重点をおいている。

Stairway が支援を行っている領域は，観光産業，先住民族，奨学金，学校，医療，環境等の多岐にわたっている。本研究では，その中でもストリートチルドレンに対する支援に焦点を当て，詳細に検討する。

3－2. ストリートチルドレン支援活動の全体

ストリートチルドレンの多くは家庭内での暴

力や虐待が原因で家族から引き離された子どもである。彼らは，ドラッグやギャング，犯罪に巻き込まれるリスクと隣り合わせで日常生活を送っている。フィリピンではこうした子どもたちを支援する施設が数多くあるが，Stairway もそうした施設の一つで，かつて路上で生活していた子どもたちの家として機能している。

彼らは，入所した時点で，健康問題，家族問題，薬物問題，法律違反，身体的・性的虐待の被害といったさまざまな問題を抱えている。また，結核を患っている子どももいるため，必要な医療を提供するための環境を整えている。

３−３．対象

Stairway は 1 年間のプログラムの参加者として最大 14 人の少年を受け入れている。年齢層は10〜14歳である。1年間のプログラムではあるが，実際には複数年にわたって支援を継続するケースもある。そのため，訪問時点では 17 人の子どもが在籍していた。

また，Stairway に在籍する子どもたちはマニラの他の施設で既にケアされていたものの，さまざまな要因でそれぞれの施設から脱走するなどのより深刻で複雑な過去がある子どもたちが多い。同施設の所在地がミンドロ島であるのは，仮に施設から脱走したとしても島外に出られないため，安全を確保しやすいことも理由に挙げられる。

３−４．支援体制

スタッフは 42 人で，「団体の概要」で述べた様々な活動を担当している。このうちミンドロ島の施設を運営しているのは 5 人のスタッフで，それぞれが複数の役割を担いながら施設の運営をしている。残りの 37 人はマニラの本部で他事業に取り組んでいる。

なお，スタッフのキャパシティトレーニングを重視しており，誰かが休んだ時のためにも，それぞれのスタッフがどういうふうに動いているか見ながら活動する必要があると考えられている。

３−５．具体的な取り組み

（１）心理社会的な介入

心理社会的な介入として，到着前とプログラム卒業前に心理アセスメントを行う。最初のアセスメントで集められた情報は，それぞれの子どもたちの治療計画作成に使われる貴重な情報となる。心理社会的な問題は，個人とグループのセラピーセッションで扱われ，毎月の経過報告とケースカンファレンスは，子どもたちの成長を評価するために行われる。最近はサークルタイムを定期的に開いている。問題があったらそこで直接話し合いをし，問題が大きくなる前に解決できるようにしている。

（２）創造的な活動

創造的なセラピーは，ダンス，音楽，アート，演劇などを通して行われる。生活技能訓練プログラムでも，創造的な表現が行われている。敷地内には大きな舞台があり，近年は Covid-19 の影響で一時的に中断しているが，発表の際には様々な関係者や地域住民が招かれるとのことであった（写真 1）。

（３）スポーツとレクリエーション

新入生の少年たちは，栄養失調やさまざまな健康問題を抱えていることがほとんどであるため，基本的な医療と歯科治療を受けると同時に，様々なスポーツやアクティビティを通じて，身体と心を強くすることが重視されている（写真 2）。そのためスポーツとレクリエーションは，Stairway のプログラムの大きな部分を占めている。こうした活動の結果，上位入賞するなどの結果も残している。

（４）社会的問題との関わりを考える教育

環境意識やミレニアム開発目標などの教育テーマが設定され，それぞれのテーマには子どもの権利という共通項が織り込まれている。さまざまな境遇の子どもたちが織りなす交流を行っている。

（５）多様性理解に関わる教育

毎年，教室でのセッションや全校生徒へのプレゼンテーションやレクチャーを行い，教室で貧困，ストリートチルドレン，国際開発の問題を取り上げている。全校生徒がボランティアとして地域社会でさまざまな仕事や奉仕活動を行い，集まったお金はすべて「Stairway」のプログラムや活動に直接役立てられている。「ICARE」は，フィリピンの多様なコミュニティや社会の現実に生徒を触れさせることを目的としたプログラムで，様々なバックグラウンドを持つ子どもたちを研修・リソースセンターに集め，1 週間にわたって交流させた。

（６）ユース・フォー・チェンジ・キャンプ

有意義な人生経験を望む子供たちや若者のためのキャンプを開催している。このキャンプの目標は，参加する子どもたちや若者たちが，認識面だけでなく，体験面でもこのことを実感できるようになることである。彼らは Stairway に滞在する人々や地域の人々と交流しながら，他の子供たちがどのように生活しているかを理解する機会を得る。子どもたちの権利や子どもたちに関わる問

題について学び，すべてを否定された人たちが，どのようにして生き延び，人生をより良い方向に変えていくのか，その回復力を目の当たりにすることができると考えられる。また，子どもたちが技術を身につけ，他の子どもたちに教える役割も担うこともある。また，子どもたちの権利や子どもたちに関わる問題について学ぶ。

Stairway ではこのユース・フォー・チェンジ・キャンプについて，視点や固定観念を変え，共感，連帯，友情を育むことを目的とした社会的な実験であり，子どもの権利を促進するアドボカシーの新しいアプローチの模索であり，大きな挑戦と考えている。

（7）キャリア発達支援

子どもたちは，さまざまな手工芸品を作る方法を学ぶ。Stairway は子どもたちからそれらの製品を買い取り，私たちの店で販売することで，彼らはプログラムを卒業するときに持っていくお金を稼ぐことができる仕組みになっている。また，学校では学術的な時間が多くなってしまうため，Stairway はオルタナティヴに考えている。学校へ行っていなくてもテストを受けて合格出来たら卒業できたり，15 歳になって資格を取れたりするショートプログラムなどさまざまな方法で仕事ができるようなキャリア発達支援を行っている。

（8）家庭復帰

最終的には子ども自身が家に帰るか，他の施設に行くかを選択し，今後のことを決める。家に帰る際は 1 ヶ月間のテスト期間を設け，地域の人たちにモニタリングしてもらうなど，さまざまな方法で子どもたちを見守っている。子どもと親にはスタッフの Social Worker（以下 SW），地元の SW，村長などの SW が関わり，お互い相談して実際に家に帰るか最終決定を行うなどして家庭復帰のための支援も行っている。

（9）安心安全

訪問した際，いつでも誰でも自由に集まることのできる空間があった（写真 3）。そこでは子ども同士や先生とのアットホームなつながりが生まれ，それが子どもたちの安心安全に繋がっている。空き時間などにこういった時間が確保されていた。

このように認知的な学びばかりではなく，グループゲーム，アートや手工芸品作り，カヤックや水泳の非競争的レース，言語能力に頼らないコミュニケーションの取り方，今までとは全く異なる背景を持つ様々な人々との関わり方など，参加者はたくさんの活動を一緒に楽しんでいる。

4　考察

以上の活動の根底にあると思われる理念や重視している観点は概ね以下のように整理できるであろう。

4－1. 活動を支える理念

（1）多面的アセスメントに基づく教育的介入

Stairway に到着前には健康や家庭，心理などの側面についての多面的アセスメントが行われ，そのアセスメントに基づいて支援計画が立てられている。そうした点からすると，Stairway のプログラムは，心理的アプローチととらえることも可能である。ただ，具体的な介入方法としては，Circle Time が用いられるなど，子どもの人間関係を活用した集団的で教育的なアプローチが活用されている。こうした介入によって長年のトラウマの後遺症に対処できる，より成熟した子どもへと成長することを目的として，子どもたちの心理的・感情的成長を促進することを目的としている。こうした姿勢は，Stairway の活動全体に貫かれており，学習の前提として，基本的な身体と心を強くすることが重視されている。インタビューでは「個別カウンセリングの時間はどの程度確保されているのか」という質問をしたところ，「カウンセリングの時間は特別に確保しているわけではない」「それは心理的な側面を軽視すると言うことではなく，日常の教育的関わりの中で配慮しながら関わっていくと言うこと」という回答があった。こうしたことから，心理学的なアセスメントを尊重しながらも，実際の支援においては，教育的な手法が採用されていると言うことができる。

（2）自尊感情・自己効力感・アイデンティティ

子どもたちがメタ認知でき，自分の悪い所だけでなく良い所を見つけられるようにすることや，キャンプでの役割を担うことで自尊感情を育てることが重要であると考えており，こうした経験を提供している。また，自分で自分の計画を立てることを大切にする中で，自立や自己主張ができるように援助し，子どもたちにはそれだけの力があると信じている。演劇活動を取り入れているが，創造的な表現は，学習を刺激し，自己表現のための建設的な手段を提供し，たまった緊張や感情を解放するための媒体となっている。このような心理教育とも言える行動を行うことで自尊感情，自己効力感，アイデンティティを育てることが意図さ

れている。

（３）人権

すべての子どもたちが豊かな人権を持ち，平等であるという原則にたって実践が行われている。実際, 建物の壁画には「Every Human Has Rights」と書かれた手製の掲示が壁一面に常設されており，この考え方が根付いていることが理解できる（写真 4)。

このことを特に意識して行われているのがユース・フォー・チェンジ・キャンプであった。先述のように，すべてを否定された人たちとの交流や様々な活動を通じて，認知的にも体験的にも，自身が豊かな人権と可能性を秘めた存在であることを実感することができるようにプログラムされていた。

（４）キャリア意識の形成

難しい家庭環境の中で育ち，これまで虐待を受けてきた子どもたちは，自分自身が自身の親や，周りの大人と同じような生活をすることを想像している。どうすればより良い生活を送れるのかといった知識を得ることができない。そんな中で，Stairway は子どもたちが自らの進路を主体的に考え，社会的自立を目指せるように，仕事につくための手段や多様な選択肢を提供するなどの支援を心がけている。

（５）地域の開発

フィリピンでは誰かが良い方向に進もうとするとき，変化を恐れて引き留め，邪魔をするというクラブ・メンタリティという言葉がある。

こうした言葉にも象徴されるように，子どもの自立をコミュニティが阻害している場合がある。Stairway では, 虐待や貧困の永続的な悪循環から抜け出すための最初で最も重要なステップであるため，このような環境にアプローチし，子どもたちが受け入れられるコミュニティ作りと，子供が教育を受ける権利を保証するために，演劇には地域の人を招いたり，地域に教育的サービスを提供することで，地域の発展の支援活動をしている。

４−２. Stairway の実践から得られる示唆

フィリピンの中心地であるマニラ首都圏の人口は 1300 万人を超えるが，その 40%程度はスラムやスクウォッターと呼ばれる不法占拠住宅に居住している。親は半失業状態にあることが多く，アルコールや薬物の問題が深刻である。その環境自体が不適切な養育環境といえるが，親子関係の中で虐待的な養育が行われることもしばしばである。そうした環境から自らを守るためにストリートに

写真１　劇場の様子

写真２　グランド

写真３　共用エリア

写真４　建物と壁面の掲示物

出ていく子どもたちや，親から捨てられたり，何らかの理由で親と離れた子供たちがマニラ首都圏だけで数万人，フィリピン全体では数十万人が路上での生活を余儀なくされているといわれる。

Stairway は, ルソン島の西に位置するミンドロ島の港町プエルトガレラにある。そこに保護されている子どもたちは，マニラ首都圏のストリートチルドレンである。こうした子どもたちが，身体的にも心理的にも社会的にも学業的にもキャリア的にも極めて劣悪な状態にあることは十分に理解できる。

冒頭で述べた通り，日本では，こうした子どもに対しては，医療的なアプローチや心理的なアプローチがとられることが多い。しかし，Stairway は，心理面を含む多面的なアセスメントを土台とした実践を行いながらも，カウンセリング等は行っておらず, それでいて確実な成果を上げていた。

その理由は，ここまで検討してきた実践の中にあると考えるのが妥当だろう。Stairway におけるストリートチルドレンの支援は，身体や健康への配慮，演劇や様々な活動を通じての心のケアと自尊感情の育成，自己の人権への深い気づき，愛情豊かなスタッフとの家族的な関係性，同様の背景を持つ友人たちとのピア･サポート的なかかわり，個に応じた学習指導とキャリア支援，彼らが生きていくコミュニティの開発など，多岐にわたる。これらのどの活動や視点が欠けても，彼らの成長を確実なものとすることは困難と考えられる。

こうした実践から日本が学ぶべきことは多い。

その第一は，子供の包括的理解のための精緻な多面的アセスメントが実施されていることである。これによって，その子どものニーズが多面的に把握されると考えられる。

第二は，このアセスメントに基づいて，心身の発達や社会性の発達，学業的発達やキャリア的発達を促進するための教育的アプローチを中核としながらも，医療的，心理的，社会的アプローチを統合した包括的実践が行われていることである。しかもそのニーズは相互に影響しあっている。例えば学業的なニーズに対応しようとしても，体力や自尊感情やキャリア的展望の改善がなければ，その改善は困難である。多面的なアセスメントによる多面的なニーズに対応した包括的実践であるからこそ，子どもの成長が可能になっていると考えられる。

日本の場合，フィリピンのストリートチルドレンのような虐待よりは，可視化されにくい虐待やマルトリートメントのほうが多い。ただ，その影響は大きく，精緻な多面的アセスメントや，それに基づく包括的実践が必要なのは同様だろう。こうした視点からの実践が日本の学校や関係機関で実施され，子どもたちの支援がより充実していくことが期待される。

謝辞

本調査に当たっては，Stairway のスタッフの方々や子ども達，また，コーディネーターを務めて下さった現地 NGO である HOLPFI の現地事業運営責任者，酒井保氏，および酒井慶子氏，Annie Asi 氏の御協力をいただいた。記して深謝の意を表する。

引用文献

大迫秀樹．（2003）． 虐待を受けた子どもに対する環境療法： 児童自立支援施設における非行傾向のある小学生に対する治療教育．発達心理学研究，14(1), 77-89.

浅野恭子，亀岡智美，& 田中英三郎．(2016)．児童相談所における被虐待児へのトラウマインフォームド・ケア．児童青年精神医学とその近接領域，57(5), 748-757.

犬塚峰子．（2016）． 子ども虐待における家族支援−治療的・教育的ケアを中心として−．児童青年精神医学とその近接領域，57(5), 769-782.

荒井葉子牢，安武繁，笠置恵子串，& 同光京子串．(2008)． 児童虐待防止のための医療機関と地域保健機関の看護職の支援と連携.

小林美智子．（2012）． 児童虐待とは．医療 国立医療学会誌，66(6), 243-249.

小玉有子・栗原慎二・高橋あつ子・神山貴弥・森恵梨菜・川崎七々海・壁谷美穂・中田智佐子（2015） イギリスにおける愛着に課題を持つ子どもたちへの対応と 日本の教育への示唆 ―The Nurture Group Network の視察を通して― 弘前医療福祉大学紀要，第 6 巻 1 号 pp73-82

永井亮．（2006）． 児童養護施設における被虐待児への支援： 児童ソーシャルワーカーによる専門的支援の技法．ルーテル学院研究紀要：テオロギア・ディアコニア： ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要，(39)，89-101.

永田拓也・栗原慎二・山崎茜（2021）愛着およびレジリエンス育成プログラムの開発と PSP への

展望―フィリピンのストリートチルドレン保護施設での実践―．ピア・サポート研究（17），31－42.
森本美絵，＆ 野澤正子．（2006）．里子 A の成長過程分析と社会的支援の必要性： 里親家庭 C への継続的インタビューを通して．社会福祉学，47(1), 32-45.
田中究．（2016）． 子ども虐待とケア． 児童青年精神医学とその近接領域，57(5), 705-718.
犯罪社会学研究 ［0386-460X］ 生島， 浩 年:2011 巻:36 ページ:119 -121.